

琴形木製品の形状からみる古墳時代の地域間交流

－中細りの形状を持つ事例を中心に－

長谷川 愛

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

琴形木製品の形状からみる古墳時代の地域間交流

－ 中細りの形状を持つ事例を中心に －

長谷川 愛

1. はじめに

奈良時代に大陸から箏や琵琶といった伝統楽器がもたらされる前から日本列島では様々な楽器が生み出されてきた。銅鐸や土鈴といった体鳴楽器や、陶埴などの気鳴楽器、そして琴形木製品などの弦鳴楽器は、弥生時代から存在し、儀式用に演奏されていたと考えられている。それを裏付けるかのように、日本各地の集落遺跡からは、それらの遺物が祭祀要素の強い遺物と共伴して出土している。このうち琴形木製品は、弥生時代中期から奈良時代にかけての製品が日本各地から約210点出土しており、法量や形状は多岐にわたり、中には時代や地域ごとに形態的特徴を持つ事例も少なからずあることから、当時の製作技術や地域間交流の様相を検討する大きな手がかりとなっている。

京都府京丹後市大宮町に所在する正垣遺跡の琴形木製品の形態的特徴から、丹後半島と周辺地域との関係性を検討するため、過去に集成した琴形木製品のデータを改めて整理したところ、両端部から中心にかけて徐々に幅が狭くなる形状をなした琴形木製品が、古墳時代前期から後期にかけての西日本を中心に8点出土していることが分かった。筆者はそれらの琴形木製品の形状と出土状況の類似性から、出土地点間での技術的交流が行われてきたと予察した。本稿では、西日本を中心とした各地域の琴形木製品に見られる形態的特徴の差異から、技術の伝播のルートを検討する。

2. 琴形木製品について

(1) 琴形木製品概説

本稿では、琴形木製品を一枚板で製作された「板作りの琴」、複数の板を組み合わせて共鳴槽を設けた「槽作りの琴」、古代中国で使用された楽器「筑」に形状が類似した「筑形木製品」の3種類に大別している。

また、パーツについて、突起に引っかけた絃をまとめる孔を「集絃孔」、上板と共鳴槽を繋げる部分を「結合痕跡」と呼び、結合痕跡のうち、木釘で留めた痕跡を「木釘孔」、紐や樹皮等を通すための孔を「柄孔」としている。琴形木製品の端部で、どちらが上に位

置するか、またそれらの名称については研究者によって異なるが、本稿では集絃孔がある方を「琴頭」、反対の突起がある方を「琴尾」と呼称する。

琴形木製品は名称のとおり、琴の形状をした木製品を指す。琴尾に絃を結びつけるための突起が複数設けられ、琴頭には結びつけた絃をまとめるための集絃孔をあけたものが基本の形状であるが、出土した琴型木製品のほとんどが祭祀具として使用された後に破壊・廃棄されているため、完形で出土する事例は非常に稀である。欠損した状態で出土した木製品の場合、突起や集絃孔、結合痕跡といった琴形木製品を構成する要素が見られ、かつ過去の事例と似た形状や痕跡があれば琴形木製品とみなされることが多い。

(2) 琴形木製品の形状

琴形木製品は、弥生時代中期からその存在が確認され、形や使用環境を変えながら奈良時代までの出土事例が確認されている。

弥生時代中期^(注1)は鳥取県青谷上寺地遺跡や石川県八日市地方遺跡など、主に日本海沿岸地域を中心に出土例が知られる。特に青谷上寺地遺跡では7点の琴形木製品が出土し、板作りの琴も槽作りの琴も両方確認されている。この時期の琴形木製品は小型で作り方が定まっておらず、形状にばらつきはあったが、琴尾の突起や柄孔といった琴形木製品の特徴的な要素は認められた。

弥生時代後期から古墳時代中期にかけては出土数が増加し、多種多様な形状の琴形木製品が見られる。大型の槽作りの琴や筑形木製品はこの時期に多く作られている。また、地域ごとに形態的特徴を持つ事例も複数見られる。例えば、北陸地方から丹後半島にかけては、琴尾に燕尾形の突起がついた琴形木製品が6点出土している。この形状の突起を持つ事例は他地域では見られないことから、北陸地方独特の特徴と考えられる。

古墳時代中期以降になると琴形木製品の出土数が大幅に減少し、それに取って代わるような形で弹琴埴輪などの土製品が関東地方を中心に相次いで出土するようになる。弹琴埴輪に表現された琴形は多くが槽作りで、突起は4～5本である。この時期の琴形木製品も大型の槽作りのものが多く、作り方に規則性があったと考えられる。導水施設の木樋がある場所、舟形・鳥形などの形代や大量の土器などが伴う祭祀遺構、さらには古墳の周溝から出土する事例が多いことから、水のマツリや葬送といった共同体をあげての祭祀に大型の琴形木製品が使用されていたと考えられる。笠原潔氏は琴形木製品の使用について、「板作りの琴は、槽作りの琴が半ば「公的な」楽器であったのに対して、「私的な」楽器ではなかったか、と考えられるのである。」と推測している(笠原1999)。しかし、弹琴埴輪の制作も古墳時代後期には消滅し、突起を持つ琴形木製品は衰退の一途を辿るようになる。

奈良時代に入ると、儀式のために丁寧につくりあげた琴形木製品はほとんど出土しなく

^(注2) 岩手県徳丹城跡では、律令期の琴形木製品が井戸枠の組材に転用された状態で出土しているが、この琴形木製品は蝦夷との饗宴等で使用されたとされている。

その一方で、木簡を転用させて作った琴形のミニチュア品が宮都や郡衙などから出土するようになる。長さが20cm程と小型で、使い尽くされた木簡を転用しているため厚さも0.5cm以下とかなり薄い。琴形木製品の形状に加工はされているが、各所に墨書の痕跡が残り、突起も刀子で切り込みを入れただけのような粗雑な作りとなっている。それらは大きさや作りの粗さから、演奏用としてではなく儀式で形代として使われたと考えられている。

奈良時代は音楽の目的が儀式から娯楽へと大きく変化するようになる転換点であり、儀式において重要な存在であった琴形は、形式だけのものと化した。現在使用されている琴や箏といった絃楽器は、奈良時代に大陸からもたらされたものが起源であり、琴形木製品が祖型ではない。

本稿で取り上げる琴形木製品は主に古墳時代に使用していたとされる槽作りの琴で、いずれも西日本からの出土品である。

3. 中細り琴形木製品

(1) 中細りの琴形木製品

琴形木製品は量や形状が多様である一方、中には地域ごとに独特の形態的特徴を持つ事例もある。特に弥生時代後期から古墳時代前期までの日本列島の各所においては、狭い地域から同じような形態的特徴を持った琴形木製品が複数確認されていることから、当時の地域間で技術的交流が行われていたと考えられている。例えば、北陸地方と丹後半島では、琴尾に燕尾形の突起を持つ琴形木製品が弥生時代後期から古墳時代前期にかけて6点出土しているが、他地域ではこの特徴を持った琴形木製品が一切発見されていない。

筆者がこの形態的特徴の地域性を踏まえて丹後半島と山陰地方の関係性を検討する中で、山陰地方の2遺跡では形状が酷似した琴形木製品をそれぞれ1点ずつ確認することが出来た。筆者はこれらの事例と、近畿地方や東海地方でみられる類似例を合わせて、計8点集成した。

集成した琴形木製品は、上板の端部の幅が最も広く、幅が両端部から中央にかけて徐々に狭くなっていく形状である。以下、この形状を「中細り」琴形と呼称する。^(注3) 琴形木製品本体の形状の類似性から、山陰地方を中心に近畿地方、東海地方にかけて広範囲な地域間交流が行われていると推察した。以下、中細り琴形木製品の事例を紹介する。

(2) 山陰地方出土の中細り琴形木製品^(注4)

① 前田遺跡

山陰地方からは14点の琴形木製品が出土しているが、古墳時代のものは鳥根県松江市に所在する前田遺跡と石田遺跡から出土した5点である。

鳥根県松江市八雲町の前田遺跡からは、2点の琴形木製品が出土している。そのうちほぼ完形で出土した大型品に、中細りの特徴がみられる。長さ160.2cm、幅は最も広い琴頭で22.5cmの、上板に共鳴槽がついた槽作りの琴である。共鳴槽を持つ琴形木製品は、上板と側板を別々に制作し、それらを木釘や樹皮などで結合するが、出土する際は上板のみ、もしくは共鳴槽のみの事例が多い。前田遺跡の琴形木製品は、両者が結合した状態で残存しているため、全国的に非常に珍しい事例である。素材はスギの柾目材を使用し、使用年代は共伴する土器から古墳時代後期のものとされている。

上板の形状は、鼓のように両端から中心にかけて幅が狭くなるもので、最も狭い部分で幅が16.5cmである。琴頭の集絃孔は隅丸三角形を呈し、その下には「W」状に浅く彫り込まれた箇所がある。彫り込みの用途については不明である。琴尾部分には本来方形の突起が5本ついていたが、うち1本が欠損している。根元には絃を引かけた痕跡があることから、琴として使用していたことがはっきりと窺える。上板の裏側には「H」状の彫り込みがあり、共鳴槽の形にはまるように作られている。

上板と共鳴槽は21個の木釘で結合している。うち14個は共鳴槽の側面に場所が来るように、両脇に7箇所ずつほぼ等間隔に打ち込まれ、6個は先端部を固定するために、両脇に3箇所ずつ集絃孔付近に集中して打たれている。また、さらに固定を頑丈なものにするためか、木釘の間に木釘を打ち足したり、樹皮を巻き付けて楔で固定したりといった箇所もみられた。上板と共鳴槽の間は1.3~1.9cmと、他製品に比べるとかなり狭い。共鳴槽の効果を持つのか不明である。

②石田遺跡

前田遺跡から北西に8kmの距離にある石田遺跡からは、古墳時代中期の琴形木製品が3点出土している。うち1点が上板のみ、2点が共鳴槽のみである。唯一の上板は縦に割れ、かつ半分以上が失われた状態だが、長さ191.8cm、現存幅13.7cm、厚さ2.5cmと大型に作られている。琴尾の突起は2本残存している。元々の幅は26cmほどで、琴尾の突起も本来は5本あったと考えられている。素材はスギで、裏面には工具で削った痕跡が全体に残っている。側面が両端から琴央にかけて中細りのゆるやかなカーブを描くように細くなっていき、共鳴槽を繋げる結合痕跡も、それに沿ってつけられている。

結合痕跡は木釘孔と柄孔を併用したもので、両端部に最も近い部分に柄孔を、その間に等間隔で木釘孔を入れている。さらに、琴央の最も幅が狭い部分には、楔を打った痕跡「楔孔」が1か所のみ残存している。端部の柄孔に樹皮等を通して結びつけ、間に木釘を打ち

付けて結合を補強させていたと考えられる。楔孔は木釘とはややずれた場所に作られているため、さらに結合を補強するために開けられたのだろう。

2点の共鳴槽はいずれも全体の半分以上を欠損しているが、中細りの形状と結合痕跡が僅かに見られる。一方はカーブを描くような狭まり具合で結合痕跡は柄孔1か所のみであるが、もう一方は直線的な狭まり方で、結合痕跡は柄孔と木釘孔を併用している。残存部分が多い共鳴槽は、結合痕跡の位置が上板と合わず、また中細りの形状にもフィットしないことから、別の個体のもつとされている。おそらく石田遺跡からは少なくとも3点の中細りタイプの琴形木製品が出土したことになるであろう。

(3)他地域から出土した中細り琴形木製品

③新谷古新谷遺跡

愛媛県今治市にある新谷古新谷遺跡からは、古墳時代中期後葉から後期の琴形木製品1点が、上板と共鳴槽が分離した状態で出土している。

上板は縦に3つに分割され、それぞれが離れた位置から出土した。長さ168cmで、幅が最も広い琴頭で29cmを測りかなり大型である。横幅は琴頭から集絃孔にかけて狭くなり、集絃孔を境に琴尾にかけて広がっていく。琴尾には方形の突起が5本完存しているが、絃を張った痕跡は見つかっていない。素材はヒノキで、両端の柄孔にはサクラの樹皮が巻き付けられている。また、焦げ痕や炭化した痕など、全体に火を受けた痕跡が残っている。

琴頭から集絃孔までの長さが約50cmと長いのが特徴で、この形状は静岡県登呂遺跡で出土した弥生時代後期の琴形木製品に見られる鴟尾状部位に似ている。琴頭部分と琴尾の突起周辺はヤリガンナによって丁寧に加工されて薄くなっている一方で、琴央の共鳴槽と被る部分は削った痕がそのまま残存している。

共鳴槽は長さ116cm、幅18cmではほぼ完形である。先述の上板に取り付けるもので、上板の溝に合うように側面の幅が琴尾側に向かって直線的に広がっている。結合痕跡も、上板の位置に合わせて左右3か所ずつ、計6か所に柄孔がつけられ、一部には樹皮も残存している。素材は上板とは異なるヌルデである。

④岡崎遺跡

京都市にある岡崎遺跡からは、古墳時代前期の琴形木製品が1点出土している。欠損しているが、残存長69.8cm、幅13.4cm、厚さ0.6cmの大型品である。最も広い端部には両端に2本の突起があるほか中心に2個の小さな穿孔がある。突起に絃を結びつけ、裏側から孔に2絃を通していたと考えられている。古墳時代前期の琴形木製品は4～6本の突起を持つのが一般的な形状であり、2本の突起を持った槽作りの琴は類例がない。また、この時代では通常、突起に結びつけた絃を通すための穿孔(集絃孔)は突起の反対側に1か所設け

るもので、突起がある端部に小さな穿孔が2つある事例は見たことがない。絃を1本ずつ通すような琴形木製品が作られるのは奈良時代以降になる。裏面には浅い削り込みがあり、これも端部の方が幅広に整えられている。仮に音を共鳴させることを目的に削った場合、この琴形木製品は上板と側板を同じ材でつくりあげた「甲作りの琴」の分類に属することになる。「甲作り」は古代では青銅製の雛形琴で使われる形状で、琴形木製品だと、滋賀県滋賀里遺跡や福岡県惣利遺跡の2か所でのみ確認されている。古墳時代前期での出土はこの岡崎遺跡の事例が初めてで、最古となる。

結合痕跡は左右に2か所ずつ、計4か所開けられているが、これも一般的な琴形木製品では見られない特徴である。

⑤市三宅東遺跡

滋賀県野洲市にある市三宅東遺跡からは、長さ161.3cm、現存幅13.8cm、厚さ1.3cmの大型の琴形木製品が出土している。時代は古墳時代中期とされ、同時期の琴形木製品と比較しても大きめの部類である。本来は幅30cmを超え、琴尾の突起も6本あったとされているが、出土時は縦方向に半分に割れたうちの片割れの状態で、突起は3本残存している。上板は琴頭の幅が最も大きく、両端からカーブを描くように琴央にかけて狭まっていく形状で、山陰地方の2点の琴形木製品と類似しているが、狭まり具合はそれらと比較してかなり緩やかである。

結合痕跡は4か所あり、いずれも長方形に穿たれた柄孔である。柄孔を使った固定方法にはおおまかに2種類あり、一つは紐や樹皮を使って結縛する方法で、これは2孔1対の柄孔で使われる。もう一つは孔に柄をはめ込んで固定する方法で、これは1孔のみ開けられた柄孔で見られる。この琴形木製品は後者を使ったスタイルで、全国的に珍しい。最も突起に近い柄孔には柄が残存している。琴頭側には2点の柄孔が密接して開けられ、うち一方は修理がなされたときに開けられたものと考えられる。共鳴槽は確認されていないものの、これらの柄孔の位置から、上板のカーブに沿わず琴尾に向かって幅を広げた台形のような形状だったと思われる。

⑥笠原南遺跡

滋賀県守山市に位置する笠原南遺跡からは、弥生時代末から古墳時代前期の琴形木製品が溝から1点出土している。縦に割れた半分が折損した状態で見つかり、2本の突起が残存しており、長さ130cmと大型(幅と厚さは不明)で、本来は突起が5本あったとされている。槽作りの琴であるが、共鳴槽は出土してない^(注5)。結合痕跡は共鳴槽を取り付けるための皮綴じ用の柄穴が等間隔に1孔ずつ、合計5箇所につけられ、側面には木釘孔が残り、綴じた皮の上から木釘を打ち込んで補強したと考えられる。突起の根元には小口板をはめた

と思われる溝が彫られ、固定するための釘孔も見られた。

損傷が激しく、最大幅の箇所を検討することはできなかったが、両端が広く、琴央にかけて緩やかなカーブを描くように幅が狭まっている。

市三宅東遺跡例と形状が類似し、琴尾の突起の形状が方形である点と、皮綴じ用の柄穴が等間隔に1孔ずつ開けられている点、幅の狭まり具合が比較的緩やかである点は共通していることから、2遺跡間では密接な地域間交流が行われたと推測できる。

⑦亀井・城山遺跡

大阪府八尾市と大阪市の境に位置する亀井・城山遺跡からは、古墳時代中期の琴形木製品とされる孔が開いた板が1点出土している。長さ60.5cm、残存幅17.5cm、厚さ2.3cmと小型で、琴尾に突起がない。杭列内の横木に転用された状態で見つ^(注6)かっている。

この木製品は報告書での呼び名が「有孔板状木製品」であり、実際の用途は不明である。しかし、集絃孔のようなものがあり、結合痕跡も他の琴形木製品のものと比較すると大きくいびつな形状で異なっているが、琴形木製品と仮定して紹介する。

表面が腐食しているものの、一部にはヤリガンナで仕上げた痕跡が残存している。脇には中央2か所にいびつな方形の穿孔が2孔1対で残っているが、本来は丸ノミ状の工具で開けられた4孔の細長い穿孔が劣化によって現在の形状になったと考えられる。

琴尾に突起がない琴形木製品は、奈良県の谷遺跡や平城京下層からも出土しているが、いずれも結合痕跡や集絃孔から琴形とみなしている。絃をひっかけた痕跡がないため、どのように絃を通して演奏していたかは不明である。

⑧六大A遺跡

三重県津市の六大A遺跡から出土した7点の琴形木製品のうち、1点が中細りタイプの形状を呈していた。古墳時代前期のもので、上板だったと考えられる。上板は縦半分に割れ、突起を失っていたが、長さ129.1cm、現存幅9.2cm、厚さ1.4cmと大型である。縦に沿って結合痕跡を示す穴が2か所開けられ、琴尾には小口板をはめるために設けられた2cm程の溝が残っていることから、槽作りの琴だったとされている。形態としては、琴頭と琴尾から琴央に向かって徐々に幅を狭くし、琴央の結合痕跡の位置で最も狭くなるため「中細りタイプ」の分類に属する形状になるものの、幅の狭まり具合が琴頭と琴尾で大きく異なる。また、山陰地方の事例のように弧を描かず、直線的に幅が変化するため、上が広く下が狭い逆台形状になる。素材はヒノキの追柁目材を使用している。

六大A遺跡からは、共鳴槽と思われる木製品が3点出土しているが、いずれも上板と結合痕跡の位置が合わないことから、別の琴形木製品につけられていたものと考えられる。

表 中細りタイプの琴形木製品一覧

Aタイプ

No.	所在地	遺跡名	時期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状	樹種	備考
1	滋賀県守山市	笠原南	弥生末～ 古墳前期	130	-	-	A-2	-	-
2	京都府京都市	岡崎	古墳前期	69.8	13.4	0.6	A-1	ヒノキ	側面に、穴があいた突起
3	鳥根県松江市	石田	古墳中期	191.8	13.7	2.5	A-1	スギ	裏に手斧による削り痕
4	大阪府八尾市・ 大阪市	亀井・城 山	古墳中期	60.5	17.5	2.3	A-1	未鑑定	杭列内横木に転用
5	滋賀県野洲市	市三宅東	古墳中期	161.3	13.8	1.3	A-2	-	-
6	鳥根県松江市	前田	古墳後期 後葉	160.2	22.5	5.5	A-1	スギ	-

Bタイプ

No.	所在地	遺跡名	時期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状	樹種	備考
1	三重県多気郡明 和町	六大A	古墳前期	129.1	9.2	1.4	B	ヒノキ	琴頭が幅広く、琴央が括れる
2	愛媛県今治市	新谷古新 谷	古墳後期	168	29	—	B	ヒノキ	焦げ痕あり、3つに分割

4. 考察

(1)形状の差異

以上の中細りタイプの琴形木製品を比較したところ、幅の狭め具合と集絃孔の位置に差異が見られることが分かった。山陰地方の2遺跡と京都府岡崎遺跡、滋賀県市三宅東遺跡、大阪府亀井・城山遺跡から出土した琴形木製品は、両端から琴央に向かってカーブを描くように幅が狭くなっていき、ちょうど真ん中

に位置するところで最も幅が狭くなる。例えるならば分銅のような形状である。その一方で、三重県六大A遺跡と愛媛県新谷古新谷遺跡の琴形木製品は、幅が最も広い琴頭先端から上部の集絃孔付近にかけて直線的に幅が狭まった後に琴尾にかけて徐々に広がっていくため、鷗尾状に似た形状を持つ。また、集絃孔の位置が前者の一群よりも琴央に寄っているため、琴頭から集絃孔までが長い。筆者は特徴の差異から2つのタイプに分類した。前者をAタイプ、後者をBタイプとする。

(2)タイプの比較

①地域

出土地域を比較した場合、Aタイプは主に日本海沿岸から大阪平野にかけて広範囲で見られた一方で、Bタイプは太平洋沿岸地域でわずか2点のみが確認されたことから、Aタイプの方が広範囲に広まっていたように見える。また、滋賀県服部遺跡と奈良県石神遺跡

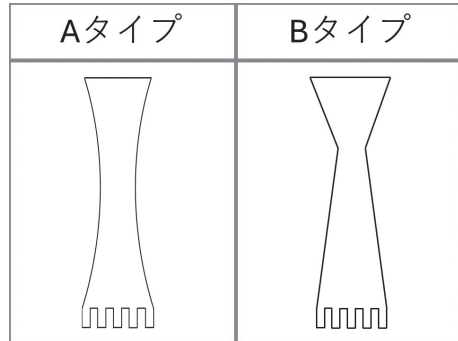


図1 中細りタイプ琴形の形態的差異



図2 中細りタイプ琴形木製品の出土地

から出土した古墳時代後期の琴形木製品は、琴頭が欠損して全体の形状が不明であるものの、琴尾から琴中央にかけてカーブを描くように幅が狭くなるAタイプの特徴を持っているためその系譜を受けているとみられ、Aタイプの琴形木製品は滋賀県にまで及んでいたと考えられる。

②時期

次に時期の観点で見た場合、Aタイプは弥生時代後期から古墳時代後期まで幅広い時代で認められ、加えて弾琴埴輪などの琴形土製品でも類似した特徴を持つ事例が多く確認されている。しかし、奈良時代に大陸から伝来した絃楽器や奈良時代以降の琴形木製品には見られないことから、古墳時代の琴形木製品独特の形状であると考えられる。

Bタイプは鷗尾状の部位をもつ琴形木製品が見られなくなる古墳時代以降に出現してい

る。琴形木製品は三重県と愛媛県のみ出土であるが、弾琴埴輪を含む土製品の場合だと伝茨城県稲荷山古墳からもBタイプの琴を模した製品が出土していることから、古墳時代以降は太平洋沿岸地域を中心に東西に広まっていったと考えられる。

Bタイプは弥生時代後期に初めて確認された鴟尾状の琴形木製品と形状が非常に類似している。鴟尾状の部位をもつ琴形木製品は両端の幅が広く、集絃孔付近にかけて直線的に幅を狭める点ではBタイプと共通しているが、最も狭い部分で1段分の段差を設けて上板の境界をはっきりと分けている。静岡県登呂遺跡で弥生時代後期の事例が3点確認されて以降、近隣の静岡県小黒遺跡でも同時期のものが見られたが、古墳時代では鴟尾状の琴形木製品は確認できず、静岡県明ヶ島遺跡から土製品が1点出土しているのみである。

(3) Aタイプについて

先述のとおり、全体の形状から端部から琴央にかけて弧を描くように幅が狭まっているものをAタイプ、直線を描くように狭まっているものをBタイプと大別した。次に、各タイプの細分を試みる。

Aタイプの琴形木製品を比較した際、滋賀県出土の2点の琴形木製品の形状が他のAタイプ琴形とは異なる特徴を持っていることが分かった。とりわけ、端部から琴央にかけての反り具合と接合痕跡の形状の2点に他地域との差異が顕著にみられた。

まず、前者についてだが、滋賀県出土の2点は他地域のものとは比べ、上板に見られる端部から琴央にかけての反り具合が小さい。琴頭と琴尾あたりは撥状に広がる一方で、琴央付近はほぼまっすぐであるため、全体的にみればほぼ長方形である。次に後者について、他の遺跡では2孔1対の柄穴や木釘孔の使用が見られた一方で、2遺跡出土の琴形ではいずれも1孔の柄穴が等間隔に穿たれていた。木釘孔も一部で確認されたものの、それらはみな補修用に打ち込まれたものであった。これらのことから滋賀県出土のタイプをA-2タイプ、それ以外をA-1タイプに細別する。

(4) Bタイプについて

新谷古新谷遺跡の丁寧な加工痕跡から、段がないのは、手間をはぶくための省略ではなく、製作者の意匠と考えられる。また、鴟尾状の琴形木製品が出土した地域とBタイプの琴形が出土した地域との間が近接していないこと、そもそもBタイプの出土数が少ないことから、地域間の技術的交流や鴟尾状とBタイプの関連性について結論に至ることは現時点で難しい。しかし、形状の類似性と太平洋沿岸地域での出土が顕著である点で見れば、鴟尾状とBタイプは関連するものと推測できる。

5. 形状からみた考察

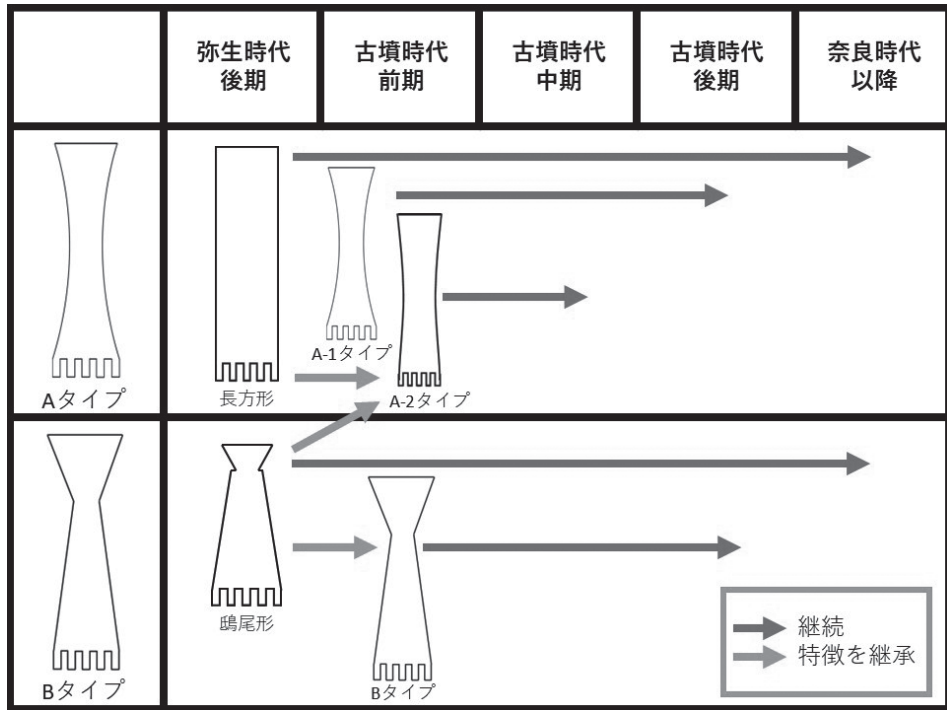


図3 AタイプとBタイプの継続時期

(1)出現期について

琴形木製品の形状の類似性が地域間交流を示すものと仮定した場合、形態的特徴が伝播のルートを追跡する手がかりになるだろう。集成した琴形木製品を出土時期からみれば、鼓形の形状は笠原南遺跡(弥生時代後期～古墳時代前期)、六大A遺跡(古墳時代前期)、岡崎遺跡(古墳時代前期)のいずれかから始まり、古墳時代中期に近畿地方を介して鳥根県山陰の前田遺跡(古墳時代後期)に至ると考えられる。

ルートを検討する際に、まずは出現期となる古墳時代前期の琴形木製品を比較し、地域間交流の起点の検討を試みる。岡崎遺跡の琴形は突出した結合部分や端部にある2本の突起といった独創性を持ったデザインであり、京都府内をはじめ、北陸地方や近畿地方でも類似例は確認できなかった。そのため、他地域との技術的交流によって生み出されたデザインとは考えにくく、独自に生み出された意匠であると推測できる。六大A遺跡の琴形は集絃孔付近の段はついていないが、形状や幅の狭まり具合が弥生時代後期の静岡県中部地域で見られる鴉尾状の琴形木製品に似ていることから、元はこの形状が発端であると考えられる。しかし、岡崎遺跡と六大A遺跡の間では、琴身の形状と出土遺物から直接的な交流はほとんど行われていなかったであろう。笠原南遺跡の琴形は、端部はAタイプのよ

うに撥状に幅が変わっている一方で、琴央付近はほぼ平行である。また、結合痕跡が、1孔の柄穴を等間隔に穿つタイプであり、他遺跡の琴形木製品にみられる2孔1対タイプは見られない。この特徴は鴟尾状の琴形木製品の特徴と、北陸地方でみられる長方形型の琴形木製品の特徴を融合させたものと推測できる。

(2)変遷と伝播のルートについて

先述の遺跡を起点と仮定し、各遺跡の琴形木製品の共通性や差異から琴形木製品の伝播ルートを検討することを試みる。しかし、資料数が少なく、結論にはいたらず、現状での見通しである。

①近畿－山陰ルート

A-1タイプの琴形木製品は、山陰地方2遺跡と近畿地方の岡崎遺跡、亀井・城山遺跡から出土している。古墳時代前期に岡崎遺跡でA-1タイプの琴形木製品が出現し、古墳時代中期から後期にかけて大阪平野、山陰地方に広まるといったおおまかなルートを検討した。岡崎遺跡の琴形木製品に見られる突出した端部や結合痕跡は古墳時代中期には消滅して、幅の曲がり具合やサイズのみが残った状態で近畿地方と山陰地方に伝わっている。

前田遺跡と石田遺跡の琴形木製品は形状や法量が類似しているが、石田遺跡は古墳時代中期、前田遺跡古墳時代後期と、出土時期に大きなずれがある。長期にわたり製作技法が共有されていたのであろうか。近接する遺跡間で出土し、それぞれの形状や法量が類似している琴形木製品は他の地域でも確認されているが(福岡県辻田遺跡と下月隈C遺跡、静岡県登呂遺跡と小黒遺跡など)、いずれも出土時期が近い。それは遺跡間での結びつきが強く、技術的交流やその伝播が容易にできたことによるものと考えられる。

②滋賀ルート

滋賀県の2遺跡(笠原南遺跡、市三宅東遺跡)から出土したA-2タイプの琴形木製品はその形状から、近畿－山陰ルートとは異なる系統を検討した。起点は出土年代から笠原南遺跡とし、市三宅東遺跡に至る。

近隣の遺跡からは、全体の形状は不明であるものの、部分的な特徴が共通している事例を2例確認することができた。同じ滋賀県に所在する服部遺跡の琴形木製品と、奈良県明日香村に所在する石神遺跡の琴形木製品である。いずれも古墳時代後期のもので、琴頭が欠損しているが、琴尾から琴央にかけてわずかに弧を描くような狭まり方になっている点では市三宅東遺跡や笠原南遺跡の琴形木製品と通ずる。服部遺跡と石神遺跡の琴形木製品は、側板が一部付随した状態で残存しており、その形態的特徴からも服部遺跡との関係性がうかがえる。

よって、東海地域で多くみられる特徴と北陸地方の特徴が笠原南遺跡で融合され、その

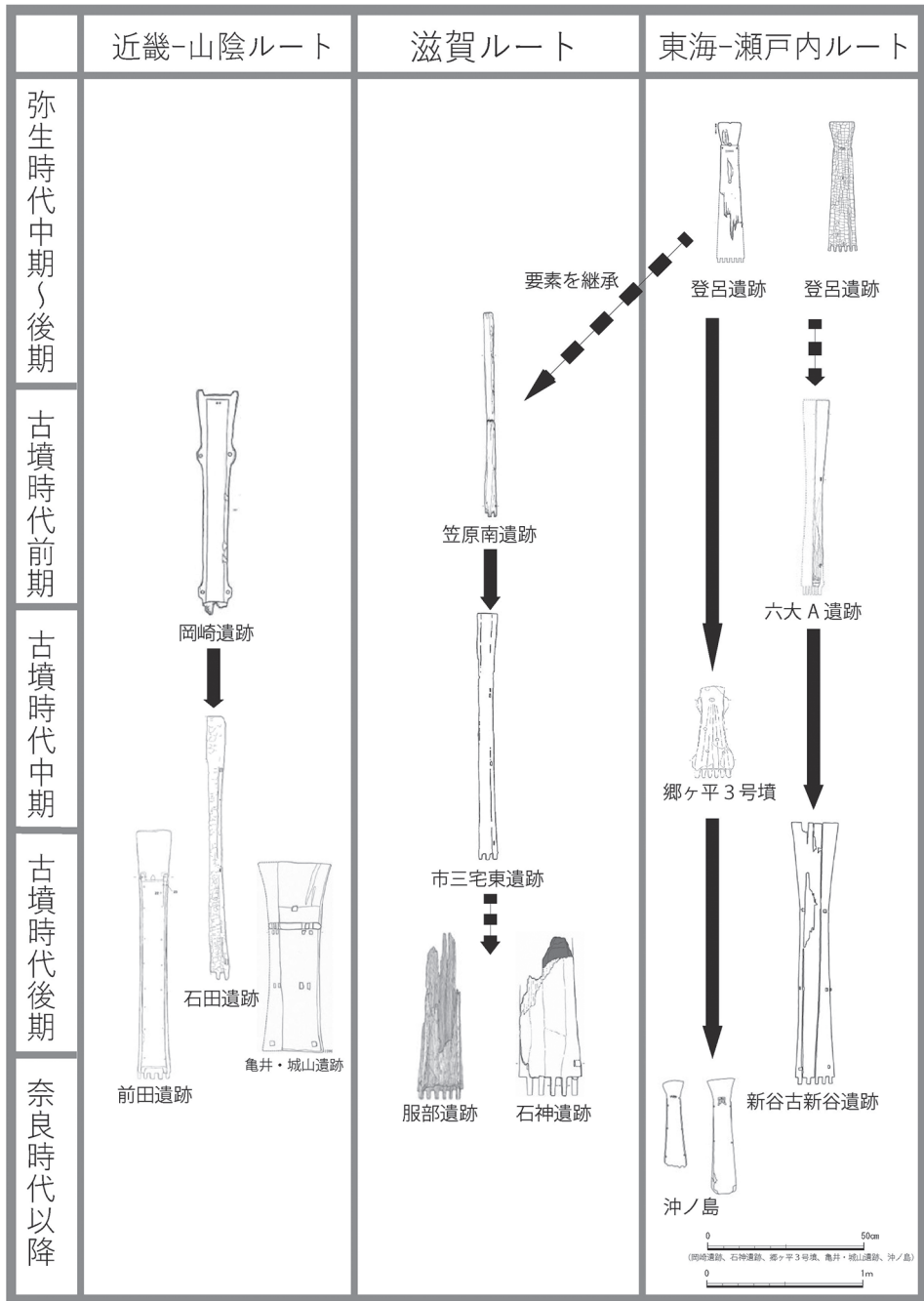


図 4 形状から見た琴形木製品の変遷

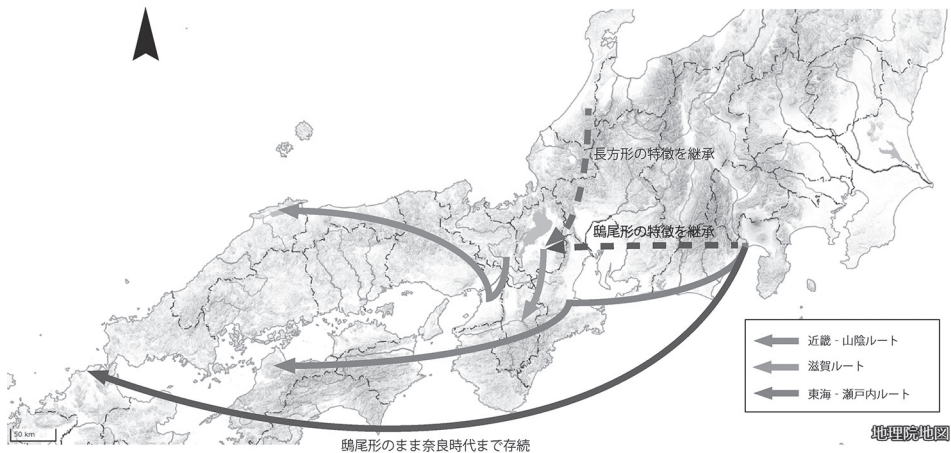


図5 琴形木製品伝播のルート

技術が市三宅遺跡、古墳時代後期には服部遺跡、さらには奈良に入って石神遺跡に至るといったルートが推定される。

③東海－瀬戸内ルート

Bタイプの琴形木製品は六大A遺跡と新谷古新谷遺跡の2遺跡のみで確認される。出土年代のみの観点で見れば、六大A遺跡から新谷古新谷遺跡の順に技術が広まったと推測できる。Bタイプの形状に非常に類似している鴟尾状は弥生時代後期の静岡県で確認されていることから、この形状の技術伝播は登呂遺跡を含む静岡県中部地域からスタートし、東海地方を中心に広がり、古墳時代前期の三重県六大A遺跡で大型琴形木製品の制作に李鏡を与え、古墳時代後期に新谷古新谷遺跡に至る。琴形木製品の出土が激減し、土製品が台頭するようになった古墳時代中期以降になると、弾琴埴輪の琴の造形にも鴟尾状やBタイプの形状が使用されることから、その意匠が残っていたと考えられる。

沖ノ島祭祀遺跡からは、古代の祭祀で使用された青銅製品が多数出土しているが、その中には琴形2点と琴柱形5点が含まれている。琴形はいずれも雛形として幣帛されていたものである。

2点の琴形は、上板と側板が一枚板で作られた「甲作り」で、上板は鴟尾状を呈している。鴟尾状と甲作りを合わせた形状は現時点では類例が見つからず、古墳時代の和琴形式から奈良時代の和琴形式の中間的形態をとっているものと考えられている。伊勢神宮にも、「鴟尾琴」と呼ばれる絃楽器が御神宝として祀られ、名前のとおり全体が鴟尾状を呈している。鴟尾状の絃楽器は大陸では見られないことから日本列島独自のデザインであると考えられるが、奈良時代以降にこの形状の琴形は沖ノ島の2点のみであり、他地域との関連性を検討することが難しい。

九州地方から出土した琴形木製品は本稿執筆時点で17点を確認したが、鷗尾状を呈したものは見られなかった。福岡県筑前町の惣利遺跡から出土した古墳時代中期の琴形木製品は甲作りで、琴央から琴尾にかけて幅が大きく広がっていく形状であり、沖ノ島出土の2点と共通しているが、完形ではないため関係性を伺うことは困難である。

弥生時代後期の鷗尾状琴形木製品や、古墳時代のBタイプ製品と関連について、資料数が少ないため詳細な検討は難しいが、佐田氏の見解通り、古来の形式と奈良時代以降の和琴様式の過渡的な存在であったと考えられる。

6. 最後に

これまで琴形木製品の形態的特徴とその系譜は、全国から出土したあらゆる形状の琴形木製品を対象に検討されてきた一方で、特定の形状のみに着目した事例は非常に少ない。今回は西日本を中心に出土した中細りタイプの琴形のみを対象を絞り、その形態的特徴の差異と地域的交流のルートの検討を試みた。資料が少ない中、範囲を狭めた状態でも3パターンの伝播ルートを挙げる事ができた。今回は全体の形状のみで考察したが、突起や琴裏などの細部にも注視するべきであった。今後の成果に期待しつつ、さらなる研究に励んでいきたい。

(はせがわ・まなみ＝当調査研究センター調査課調査員)

注1 縄文時代後期から青森県是川中居遺跡などで確認されている篋形木製品に対して、絃楽器として使用された「楽器説」と「緯打具説」があり、現在でも確証が持てないため、本稿では対象から外し、青谷上寺地遺跡の琴形木製品が該当する弥生時代中期を最古とする。

注2 平城京などの都城や城柵などでの出土は確認されているが、多くが形代である。

注3 この形態の名称について、笠原潔氏は「中細りタイプ」、荒山千恵氏は「鼓状」、山口均氏は「無段式広頭型」と呼称しているが、本稿では分かりやすさから笠原氏の呼称を一部採用する。

注4 「山陰地方」の範囲は学問の分野などによって異なるが、本稿では鳥取県と島根県の範囲を指している。

注5 用途不明の木製品が上板と並び折り重なって出土し、その特徴から共鳴槽の一部と考えられたが、詳細は不明である。

注6 古墳時代中期以降では琴形木製品が堰材や井戸枠などの別の用途に転用される事例も少なからず見られるようになる。

参考文献

荒山千恵 2014『音の考古学－楽器の源流を探る』北海道大学出版会

内田好昭 1993「岡崎遺跡から出土した木製弦楽器について」『杉山信三先生米寿記念論集平安京歴史研究』

(財)大阪文化財センター 1980『亀井・城山』

笠原 潔 1994「出土琴の研究 (1)」『放送大学研究年報』12

笠原 潔 1995「出土琴の研究 (2)」『放送大学研究年報』13

笠原 潔 1998「出土琴の研究 (3)」『放送大学研究年報』16

笠原 潔 1999「出土琴の研究 (4)」『放送大学研究年報』17

笠原 潔 2004『埋もれた楽器－音楽考古学の現場から』春秋社

京都市考古資料館 2023『おこしやす、古墳時代へ』

滋賀県教育委員会文化部文化財保護課ほか 1987『笠原南遺跡発掘調査報告書』

福岡市教育委員会 2004『下月隈 C 遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 795

杉野友香 1997「日本原始・古代の琴」『古事：天理大学考古学研究室紀要第2冊』

杉本源造 1989「市三宅東遺跡出土の琴状木製品」『滋賀考古』1

高野陽子・福山博章 2017「日本海沿岸地域における弥生時代木製品にみる地域間交流－桶形容器を中心に－」『京都府埋蔵文化財情報』第131号

奈良文化財研究所 1985『木器集成図録』近畿古代編篇

福岡県教育委員会 1979『春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査』山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 12

松江市教育委員会／松江市教育文化振興事業団 2004『石田遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書 95

三重県埋蔵文化財センター 2000『六大A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 115-17

水野正好 1979「日本古代琴資料集成」『奈良大学研究紀要 8』

桃井宏和 2009「木製品の結合方法－構造琴を中心に－」『元興寺文化財研究所研究報告 2008』

八雲村教育委員会 2001『前田遺跡 第II調査区』八雲村文化財調査報告書 19

山口 均 2000「出土琴にみる地域的諸相」『平成11年度財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城 12』

山田昌久・藤本清志 2019「新谷古新谷遺跡2次調査出土の二つの琴」『紀要愛媛』第15号